

香川県の具体的移住行政

13. パラグアイ日本語教師派遣事業の創設

南米各国における移住社会の成熟化に伴い、日系人1世が高齢化し、2、3世たちがその割合を高める中で、地方の移住地(コロニア)ではそれ程でないものの、都市部に住む日系人の家庭内での親と子や孫との会話や、日本文化の継承に支障が来す程、深刻な日本語教育の問題が露呈するところとなっていた。特に日本語教育を行うにも、これまで活躍してきた教師も高齢化し、教える日本語も移住当時のもので現代の日本語とは少し異なり、さらには若い日本語教師のなり手も少なく、日本語教師不足は否めなかった。このような話が、1992年(平成4年)春、パラグアイ香川県人会長笠松尚一氏から県に寄せられた。

この南米の移住者社会が抱える切実な問題に、県として何かの形で答えられないかと考えたのが、南米に県から日本語教師を派遣するという事だった。これは移住者支援の事業であるが、まだ自治体ではあまり着手していなかった国際協力の面も併せ持っており、今後において非常に意義がある事業であった。

しかし当時、全国的にみて県民を海外に派遣する事業は希れであった。全く派遣のノウハウもないし、

まして治安が悪いと言われている南米への派遣で、万一事故があったらどうしようか、さらに県民が果たして応募してくれるかという不安もあった。この点を笠松会長に相談すると、「確かに南米は危険だが、パラグアイの首都アスンシオンは比較的治安がいいし、私が何かにつけて面倒を見るから、試験的に県から日本語教師を送ってくれないか」とのこと。これで、万一の時は対応できると考え、香川県国際交流協会の事業として、パラグアイに日本語教師を派遣することを決定した。

急いで、同年9月に派遣教師を募集したが、時々、国際交流協会に顔を覗かせていた武田真佐子さん、ただ一人が応募してきた。彼女はすこぶる元気者で、怖さ知らずの所があるので、南米に送るには適格と考えたが、日本語教師としての経験はなかった。急ぎよ、国際交流協会の日本語指導ボランティア養成講座に2ヶ月間だけ割り込ませてもらい、急ごしらえの日本語教師に仕立てた。何とか基礎ができたので、アスンシオン日本語学校にその年の12月に、6ヶ月間の任期で送り出した。武田さんを初代の日本語教師として送り出し、彼女の働きぶり、派遣効果、学校の受け入れ状況、治安状況などを見て、本格的な事業にするかどうかを判断することとした。

翌1993年(平成5年)4月に、南米5ヶ国の6香川県人会長や平井知事らが出席して南米県人会長会議がアスンシオンで開催され、さまざまな移住社会が抱える問題を議論した。席上、笠松会長から「母県が実施した日本語教師派遣事業は、他に類を見ない良い制度であり、派遣教師も子供たちにとけ込み、日本語教育の効果があがり、学校関係者や父母も本当に喜んでいて、今後も続けてもらいたい」との要請がなされ、知事もその話喜び、本格的実施を快諾した。



第1回 日本語派遣教師

以後、財政難の中においても工夫しながら10年間にわたり当事業が続けられ、香川県という小さな県の力でも、広い南米で大きな成果を挙げることができた。そんな中、2002年(平成14年)1月、笠松会長は、日本語教師派遣事業が事故もなく10年間続けられたという誇りと満足を胸に、静かに息を引き取られた。当事業は10年を一区切りとして、2001年度派遣事業を最後に終止符を打つこととなった。